

氏名（本籍）	菊池真理
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博乙第 2985 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	内戦後のスリランカにおける「傷つきやすさ」に関する人類学的研究 —東部州バティカロアに暮らす人々の事例を中心として—
主査	筑波大学 教授 Ph.D. 内山田 康
副査	筑波大学 准教授 博士（学術） 木村 周平
副査	筑波大学 助教 博士（国際政治経済学） 根本 達
副査	京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授 Ph.D. 藤倉 達郎

#### 論文の要旨

本論文は、スリランカ内戦（1983-2009年）後の東部州バティカロア県の村（A村）で暮らすスリランカ・タミルを主な研究対象とし、人々の傷つきやすさの経験を、軍隊、警察、ごろつき、LTTE、LTTEカルナ派、親族、家族、隣人との日々の関わり合いにおいて記述した民族誌である。著者は、暴力の苦しみと哀悼の経験、シンハラとタミルの日常的な関係に着目し、二つの傷つきやすさ、すなわち（1）相手からの暴力で傷つく可能性と、（2）傷ついた相手に感応して傷つく可能性において、人々がどのようにして相手を傷つけ、傷つき、傷ついた相手を思いやり、時には民族間の境界を超えて感応し合うのかを描き出している。そのパースペクティブは、戦争に勝ったシンハラと負けたタミルという非対称の集合意識の水準と個々人の対面状況における傷つけ傷つけられる経験に振り分けられる。シンハラが支配する国家統合のプロセスの中で、A村の人々は暴力によってさらに傷つくことを恐れている。彼らは軍隊、警察、その下で働くタミルの手先の暴力に晒されているが、時に民族対立の構図を超えて感応が起こる。国家的な舞台仕立ての中ではタミル同士も敵対するが、暴力装置の中で働くタミルが心の中に抱く苦しみや悲しみも描き出される。本論文は全7章から構成される。

第1章「序章」では、まず暴力の人類学と苦しみの人類学がレビューされる。その中でもヴィーナ・ダースらによる、日常的なものを通して暴力の経験を乗り越える研究に着目し、ヴィトゲンシュタインの哲学的な文法に倣った他者の苦しみを認知することによる癒しの可能性が示される。著者は、ダースが問題提起した苦しみの認知が苦しみへの応答となる可能性を示した後、苦しみの認知ではなく、北村毅が論じる苦しみへの感応というもう一つの可能性を示している。

第2章「タミル村落の人々をとりまく政治的・経済的状況」では、前半において東部州バティカロア県のタミル村落に住む人々が自分たちの国を「スリランカ」ではなく「イーランガイ」と理解しており、シンハラ仏教のナショナリズムを体現した前者を受け入れていないことを示す日常のやりとりが紹介されている。その後、内戦の背景が述べられ、2018年3月に起きた反ムスリム暴動を事例として、シンハラ「私たち」から「私たち」ではない「彼ら」がどのようにして作られるのかが語られる。LTTEの支配下にあったA村の歴史と日々の暮らし、内戦の経験、LTTE（反政府）およびLTTEカルナ派（政府側）の暴力によって傷ついた経験、

内戦後に自分たちが何者であるのかを国家の暴力装置によって規定される経験が描かれる。

第3章「親密な他者の苦しみへの感応」では、筆者が親しくしていたインフォーマントのセルヴィーの3女で脳腫瘍を病むタドゥーシャの傷つきやすさ、そして彼女の傷つきやすさに傷つく母親のセルヴィーを思いやるタドゥーシャの事例をはじめとして、親しい他者が傷つくことに傷つき感応する人々の様子がいく通りにも記述される。人々が、傷つき苦しむ相手を見て自分の心身を痛めて「パーヴォム」（かわいそう）だと思いやり、相手の苦しみを思いやることや、苦しむものたちのための願掛け、病者を見舞うことも、苦しみを軽減させようとする行為であるとする。苦しみと悲しみの中で生きる傷つきやすい人々が、傷つく人々を「パーヴォム」と思いやり、この感応を通して生きてゆく様子が記述されている。

第4章「死者の苦しみへの感応」では、国家とLTTEによるエスノ・ナショナルな追悼と人々の哀悼の実践が比較対照されている。国家による追悼では、「私たちの人々」の被害が強調され、それと対になったLTTEの残虐性もまた強調されている。一方、個々の人々による死者の哀悼は、親密な他者たちの苦しみへの「傷つきやすさ」に基づいており、シンハラもタミルも死者の苦しみの「傷つきやすさ」故に、互いの痛みや苦しみに感応すると指摘する。さらに、政府軍側に連れ去られて強制失踪した女性ミーナの招魂儀礼において、ミーナの魂から、霊媒を通してナショナルな追悼によって沈黙させられる苦しみが語られることが論じられる。

第5章「何者にもなり得るということ」では、村人たちが国家の軍事的言説である「シンハラ勝利、タミルの敗北」によって潜在的な裏切者と見なされながらも、生き延びるために、このような言説を利用して「猿のように生きる」様子が描かれる。恋人を巡る争いで息子を殺された父親は、この事件をLTTEによる殺人として警察に届けて加害者から毎月金を受け取っている。同じタミルでありながら村人を監視するラージャンは、その時々権力に寄り添い、村の内部の者でありながら、外部の暴力装置と結びつき、これを後ろ盾として地元のギャングとして、また、母親の息子として生きているとする。しかし「猿のように生きる」彼もまた傷つきやすさを垣間見せることを指摘する。こうした「猿のような」生き方は、人々の未決定で多様なあり方を示すと結論する。

第6章「「私たち」の多様なありよう」では、内戦後のバティカロア地区における、タミルとシンハラの間でどのような関係が築かれているのかが記述されている。彼らは日常的に親しい関係の一部になっていく過程において、相互の（経済的な）脆弱性を補い合い、相互の傷つきやすさに対処している。事例では、タミルの家族の家に住むシンハラ女性が、タミル語を覚え、他者の傷つきやすさに感応し、次第にアッカ（お姉さん）と呼ばれるようになった過程が描かれる。他者に対して閉ざされた「私たち」のありようが支配的ではあるが、相手の苦しみへの感応の回路をもち、脆弱さを補い合う「私たち」のありようも可能であることを論じている。

第7章「考察及び結論」では、内戦後の東部州バティカロアで暮らす人々が、他者に対して「開かれてある」が故の二つの「傷つきやすさ」に着目し、人々が未決定で多様なあり方で存在しており、多様な繋がりを持つことを示している。その上で、国家による閉じた「共同体」の創造と人々による開かれた実践が対照される。人々は他者との関係における二つの「傷つきやすさ」故に、他者に暴力を振るう一方で、その苦しみに感応して気遣いや助けの手を差し伸べたり、苦しみを癒したりすることができる。人々はまた、排他的な「共同体」の一員となり得る一方で、暴力の加害者を「敵」として排除せず、社会的なつながりに含むことも可能にしていると指摘する。さらに、相手の苦しみへの感応の回路が閉ざされるような集合意識に基づいた「私たち」のありようを生み出すことがある一方で、「私たちのように苦しむ」相手の苦しみへの感応の回路を開くような「私たち」のありようも可能にするのであると結論する。

## 審査の要旨

### 1 批評

本論文は、スリランカのLTTEが支配していた地域にあるタミルの人々が住む村で、2014年3月から2018

年3月まで、主にタミル語とシンハラ語を使って合計22ヶ月のフィールドワークで可能となった内戦に負けた側のタミルの村の人々の「傷つきやすさ」の多様な様相を描いた民族誌である。内戦後の東部州バティカロア地区でフィールドワークを行うことは極めて困難であったにも関わらず、著者は、この難しいフィールドに入り込み、タミルのある家族の信頼を得て、日常を過ごし、詳細で陰影のある人々の傷つきやすさの様相を描いている。これだけでも、この論文には大きな価値がある。それに加えて、著者はシンハラ語が話せるために、タミルが住む地域のシンハラの人たちも心を許して心のうちを打ち明けている。これに加えて著者は英語を話せることから、タミル語しか話さないインフォーマントたちには頼りにされた。スリランカで使われる3つの言語を駆使し、地にはう虫のように地域の生活に根ざしてタミルの村の細やかで複雑な傷つきやすさの諸様相を描いたこの民族誌は、内戦後のタミルの地区の日常を描いた民族誌に新たな基準を示す作品となることは間違いない。

著者は傷つきやすさの二つの面、すなわち暴力に傷つくことと、暴力に傷ついた他者に感応して傷つくことに着目して、内戦後の負けた側の日常において、人はいかにして開かれた存在であり得るのかという問題を追究している。スリランカ内戦は残酷を極め、LTTEが支配していたこの村で、LTTEからの暴力、政府軍からの暴力、身近なところにいるごろつきからの暴力を免れなかった者はいない。戦勝側によるバティカロア地区の統治もタミルたちに対して強圧的であるから暴力は続く。よって傷つきやすさへの着目は時宜を得たものであり、本研究の学問的な貢献は極めて高い。

本論文は、優れた民族誌ではあるが、いくつかの改善されるべき問題を抱えている。冒頭の理論的なレビューにおいて、ヴィトゲンシュタインの“The Blue Book”のある一節に基づいて、他者の痛みを認知すること(acknowledgement)の重要性を主張するヴィーナ・ダースの論考が参照されているが、ダースの孫引きを鵜呑みにするのではなく、ヴィトゲンシュタインのオリジナルに戻り、ダースの議論を吟味すべきだった。ダースはヴィトゲンシュタインの解説をしているCavellの言葉を引用するが、引用されたのはダースの論考にコメントしたものであり、ヴィトゲンシュタインのテキストとダースの議論を結びつけるものではない。次に、本論の議論は、集合意識と個々の対面状況の実践の対照的な二つモデルを提示して、豊かな民族誌をそのどちらかに振り分ける方法を採用している。この枠組みは足かせとなっている。さらに「私たち」と「他者」の作られかたにおいて、まず「私たち」があり、そうではない「他者」が作られるとされる。これはインフォーマントの言うことを無批判に受け止めたものだろう。「他者」を作ることを通して「私たち」が作られることも考えられるべきだった。また繰り返しが多い点は改善の必要がある。

## 2 最終試験

令和3年1月25日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(1)に相当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

## 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。